

## 小学校の学級活動で用いられる技術の変遷

—— 学校は心理学的な技術をどのように受容するか ——

### Changes in Techniques which are Used for Classroom Activities in Japanese Elementary Education

教育学科（特任） 保 田 直 美

#### 抄 録

本稿では、小学校特別活動の「学級活動」の領域で、どのような心理学的な技術が戦後用いられてきたかを主に小学館『小三教育技術』の分析を通して明らかにした。1950年ごろから1980年ごろまではソシオメトリックテストが、2000年代半ばからは構成的グループエンカウンターなどの心理教育的な技術が多く用いられていた。加えて、「楽しい」「あたたかい」支持的な風土を求める傾向や、小集団の形成を重視する傾向も、戦後継続して見られた。心理学的な技術が広く受け入れられる上では、これらの要素を満たすことも重要となっていると考えられた。また、ソシオメトリックテストや心理教育的な技術が普及した時期は、教師が心理学的な技術について管轄権をある程度持っている時期であり、教師が管轄することで学校現場の文脈で利用しやすいよう技術が変換・パッケージ化されていることも受容の背景となっていると考えられた。

Key Words：特別活動／学級活動／心理学的な技術／『小三教育技術』

#### 1. はじめに：学校と専門知識・技術

現在、学校には、生徒指導上の問題に対応するための心理学的な技術やソーシャルワークの技術、あるいはICT技術など、さまざまな技術が取り入れられている。しかし、そのいずれもが学校現場に定着するわけではない。学校はどのような形で専門知識・技術（expertise）を受け入れる特性を持つのだろうか。戦後日本における小学校の学級活動で用いられる技術の変遷を明らかにし、それを通して学校が技術をどのように受容するか、その特性について考察し

たい。

専門知識・技術は固定した形を持つ不変のものではない。科学技術社会学のアクターネットワーク理論においては、専門知識・技術は関連するアクターが構成するネットワークの一時的な結果としてとらえられている（Latour, 1987）。専門知識・技術のネットワークは、社会的あるいは技術的（自然的）文脈により随時再構成されていく。たとえば、Eyal（2010）は、そのような考え方をもとに、自閉症の診断数の増加について、その増加の背景に、親と心理学者・セラピストの同盟を中心とする専門知識・技術をめぐる新しいネットワークの創出がある

ことを指摘している。

学校では、これまでさまざまな専門知識・技術が使用されてきた。たとえば心理学的な知識・技術など、学校である種の専門知識・技術の使用が広がりを見せる時、そこでは何らかの形でその再構成が起こっていると考えられる。何らかの変化が起こっているからこそ、専門知識・技術が存在した元の文脈とは異なる、学校という制度的文脈で広がりを見せることができると考えられる。学校ではどのような形で知識・技術が再構成される傾向があるのだろうか。教育課程の一部を対象に、特に心理学的な技術に注目して考察する。

## 2. 分析の対象:特別活動の「学級活動」

本稿で分析の対象とするのは、特別活動の「学級活動」である。特別活動は「望ましい集団活動を通して」児童生徒の「自主的、実践的な態度」を育てることを第一義とする教育課程である(文部科学省, 2008)。児童の主体性を非常に重んじる教育課程であるため、教師が操作的な技術を用いることは比較的行いにくい。ゆえに、それでも学校の中で残る技術、学校の再構成のパターンが見えやすくなる可能性があると考えて対象とした。

現行の平成20年告示の小学校学習指導要領では、特別活動の内容は「学級活動」「児童会活動」「クラブ活動」「学校行事」に分類されており、本稿が対象とするのは、この分類のうちの「学級活動」である。しかし、特別活動は戦後一貫してこの分類を保持してきたわけではない。特別活動の学習指導要領の内容を概観することで、本稿の考察の対象を示す。

そもそも特別活動という領域ができたのは1968年の改訂時である。特別活動に該当する内容は1947年には「自由研究」という教科の中に位置づけられており、「クラブの活動」「当

番の仕事」「学級委員としての仕事」がそこに含まれていた。1951年の改訂では、それらが「教科以外の活動」として整理された。その内容は、「①民主的組織のもとに、学校全体の児童が学校の経営や活動に協力参加する活動(児童会 イ 児童の種々の委員会 ウ 奉仕活動)」「②学級を単位としての活動(ア 学級会 イ いろいろな委員会 ウ クラブ活動)」であった。1958年の改訂では、「児童会活動」「学級会活動」「クラブ活動」が「特別教育活動」としてまとめられ、1968年の改訂では、「特別教育活動」を「児童活動」という名称に変え、「学校行事」「学級指導」を加えて「特別活動」とすることとなった。1989年には、「児童活動」の一種であった「学級会活動」と「学級指導」を合わせる形で「学級活動」が新設され、現行でも踏襲されている。ここでは、児童の活動としての学級会活動と学級指導の双方を含むものとして学級活動をとらえるが、特に、より前者の側面が中心となる「学級活動(1) 学級や学校の生活づくり」に焦点を当てる。「学級活動(1)」は具体的には、「話し合い活動」「係活動」「集会活動」から構成される。主にそのような場面で使用される技術の変遷を把握することが本稿の大きな目的となる。

関連する先行研究としては、既に安藤(2013)が、学級活動と不可分な一面を持つ学級経営について戦後の歴史的展開をまとめている。安藤(2013)によれば、戦後の学級経営論は、生活綴り方的学級経営論から1960年代・70年代を中心とした全国生活指導研究協議会(全生研)の「集団づくり論」、それに対する批判から1970年代後半から登場してきた受容主義の学級経営論(個を生かす集団づくり、AD理論)、1980年代に大きな広がりを見せた「教育技術の法則化運動」などを経て、現在は「学級集団心理学や学校カウンセリング論に依拠するさまざまな活動プログラムや診断ツールへの関心も

高まっている」(p. 22)。そのような経緯も踏まえながら、学級活動における技術の変遷を検討したい。

### 3. 分析①：特別活動の出版書籍にみる全体的動向

分析はまず、特別活動の全体的な動向をとらえるために、特別活動においてどのような議論が影響力を持っていたかを整理する(分析①)。その上で、比較的現場に近いところで「学級活動」に関してどのような技術が用いられてきたかを知るために、小学館『小三教育技術』の通読による分析を行う(分析②)。

分析①では、一般書を多く含む書誌情報が検索できる国立国会図書館のNDL Searchと大学図書館等が所蔵する本を検索できる国立情報学研究所のCiNii booksを用い、表1の各期間に出

版された分類番号375.18(特別活動)の本の著者のうち、比較的多く(おおむね3冊以上)執筆している著者をピックアップした<sup>(1)</sup>。期間は、上述の安藤(2013)の記述を念頭に、できるだけ各期間が一定の長さになるような形で設定した。

もちろん、出版点数が多ければ影響力があるとも限らないが、各時代のおおまかな状況は把握できるだろう。期間①には、生活指導に関わる議論など、教育学者が中心となって議論が進められていたが、期間②にはそれらは続きつつも、心理学や教育相談を基礎に持つ論者が登場し、期間③にはその傾向がさらに強まる。高校のホームルームや集団づくりに関する本が多く出され、並行して、ゲームやレクリエーションの出版を行う著者が登場する<sup>(2)</sup>。期間④は、心理学的な背景を持つ論者が中心ではなくな

表1 特別活動の著書の出版点数の多い著者(敬称略)

期間	NDL	CiNii	出版点数の多い著者
① 1945 ～ 1959年	26件	20件	宮坂哲文(教育学)、大浦猛(教育哲学)
② 1960 ～ 1974年	69件	23件	宮田丈夫(教育学)、堀久(教科調査官、生徒指導、カウンセリング)、飯田芳郎(教育相談)、家本芳郎(教員、生活指導)
③ 1975 ～ 1989年	327件	129件	宇留田敬一(教員、カウンセリング)、青木孝頼(心理学、生徒指導、教科調査官)、飯田芳郎(心理学、教育相談、教科調査官)、※山本洋幸(明治図書より高校HRに関する図書多数)、※小菅知三・※松崎咲子(両者とも明治図書よりゲーム集・レクリエーション集の図書多数)、※全国高校生活指導研究協議会、※杉田儀作(埼玉県立教育センター研究室長)、※杉山正一(教員、東京都立教育研究所指導主事)
④ 1990 ～ 2004年	490件	130件	宮川八岐(教員、教科調査官・視学官)、成田国英(教員、指導主事、教科調査官)、高橋哲夫(ガイダンス)、※渡部邦雄(1992年に指導要録・通知表の記入文例出版)、※岡本孝司、※上杉賢士(教員、教育行政、生徒指導)、※井上裕吉、※伴貞男
⑤ 2005 ～ 2015年	209件	62件	※杉田洋(教員、教科調査官・視学官)、※八巻寛治(教員、上級教育カウンセラー、ガイダンスカウンセラー)、※宮川八岐(教員、教科調査官・視学官)、※師尾喜代子(教員、TOSS中央事務局)、※国原厚志(教員、理科教育)、※赤坂真二(教員、学校心理士)

(※は国立国会図書館の著者名キーワードよりピックアップ。無印はCiNiiの検索結果より。氏名後の(かっこ)は著者の経歴や専門分野を調べることができた範囲で記入している。)

り、教科調査官が出版の中心となる。「楽しい学級活動」をキーワードとする著作を出版する著者が活躍する。期間⑤には、構成的グループエンカウンターを活用した特別活動やアドラー心理学をベースとしたクラス会議などを提唱する、心理学関係の資格（ガイダンスカウンセラーや学校心理士）を持った論者が登場する。心理教育的な実践が台頭しているといえるだろう<sup>(3)</sup>。

#### 4. 分析②：『小三教育技術』にみる「学級活動」で使用される技術の変遷

特別活動全体については、当初は教育学者が中心となっていたが、1960年頃から1990年頃にかけて心理学や教育相談に関する専門的背景を持つ論者が増加し、1990年～2004年頃にかけては、それらが減り、教員・教科調査官が増え、2005年からは教科調査官に加えて、再び心理学的な背景を持つ論者が見られるようになった。では、つぎに、特別活動の中でも特に「学級活動」については、どのような技術が受け入れられてきたのだろうか。小学館『小三教育技術』を対象に分析を行う。

『小三教育技術』は戦後早い時期（1948年）から現在まで継続して発行されており、現場の教員を主な読者層としている。『小一教育技術』～『小六教育技術』まで各学年のものが発行されており、いずれも教育雑誌において発行部数の上位を占めている。本稿では『小三教育技術』の特に奇数年の4月・5月号を中心に、学級の生活づくりに関連すると思われる記事を通読し、実践で用いられている技術の傾向を整理した（収集した記事は4月・5月号以外も含めて277件である。収集した記事のリストは論文の最後に付す。リストには279件あるが、うち2件は国会図書館にもなく未収集である。）。

##### 4-1. ソシオメトリー

戦後初期から頻繁に登場するのがソシオメトリーという技法である。ソシオメトリーとは、特に小集団について集団の対人関係からその構造を明らかにする手法である。田中（1969）は、ソシオメトリーについての定義はさまざまであるが、「ソシオメトリックテストによって調査し、かつソシオグラムによって描写される相互人間関係の量的研究」というのが、最も普及している定義としている（1969, p. 20）。結果の整理の仕方としては集団構造マトリックスを描く方法もある。類似のものとしてゲスフーテストがある。こちらも集団内成員の相互評価であることから、ソシオメトリックテストの特殊な変形とも言える（田中, 1969, p. 270）。『小三教育技術』には、たとえば図1のようなソシオメトリックテストの結果が掲載されている。

1950年ごろの記事では、戦後のガイダンスの流行の中で、さまざまなテストを使う様子が見えてくる。たとえば、1950年3月「わが学級経営を顧みて」では、4月に種々の調査（環境調査、学業テスト、知能テスト、性格テスト、ソシオグラム）を行っている様子が描かれている。また、1951年6月にはゲスフーテストを使ったグループ分けの記事も見られる。

一方で、そのような、学級集団診断に関して調査カードやソシオグラムを使うやり方への教員の抵抗感も、1950年代半ば頃からあらわれ始める。「そんなのは運動場で遊んでいるのを見ればよくわかる。」（1954年4月 編集部司会と教員3名の対談）、〈愛情によって子どもを知ることが科学的な方法で知ると同時に一つの条件となる。〉（1955年4月）、〈学級のふんいきは（社会測定法以外にも）質問紙、作文日記、感想などを通して見る。〉（1956年4月）といった記述が見られるようになる<sup>(4)</sup>。

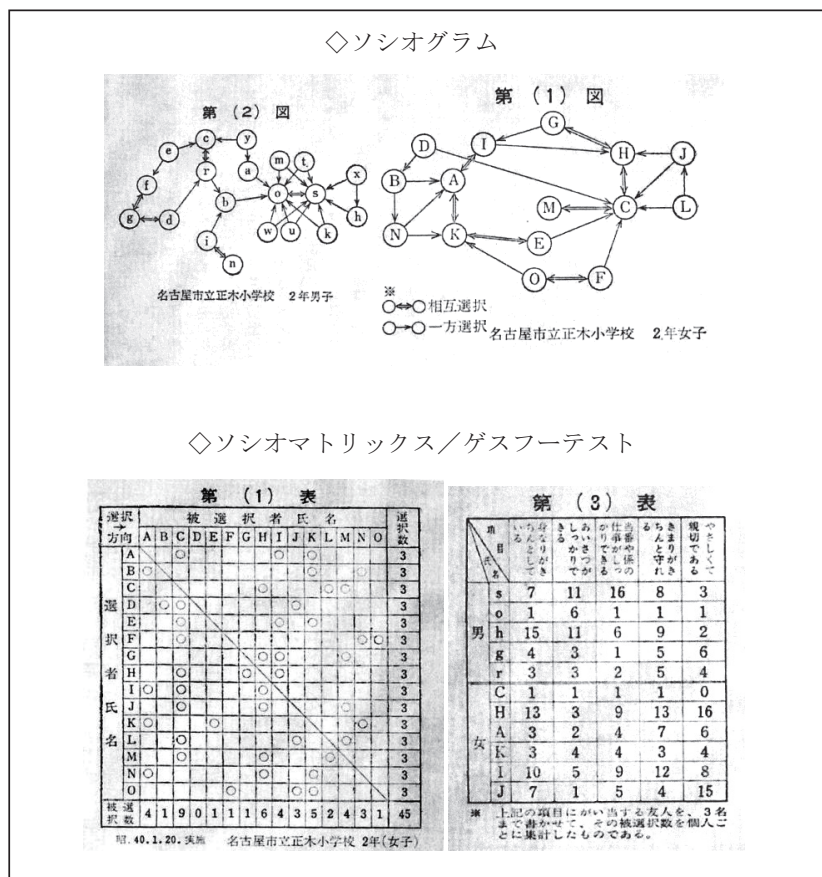
抵抗感はあるものの、1980年頃までは、学級の人間関係の構造をとらえ、座席やグループ・



班を決めるための方法として、頻繁に記事の中に登場する。1956年4月の増刊号の「学級経営のためにどんな基礎調査が必要か」という記事では、家庭環境診断テスト・知能テスト・ウィスク・ゲスフーテスト・診断性向性検査などさまざまな心理テストが挙げられているが、それ以降、次第に心理テストについてはソシオメトリックテストが中心となっていく<sup>(5)</sup>。1958年4月には、1950年代に注目されていた「ボスの児童」を把握するためにソシオグラムが用いられ、1961年4月（増刊）では「ソシオグラムとゲスフーテストの利用などによってまず学級のリーダーを把握することが必要である」ことが

述べられている。また、そのような学級の構造を踏まえて、組織作りを行うためにも活用されている。1961年に4月には、学級の生活グループ・係グループを作るために、観察調査やソシオグラム・ソシオマトリックス・ゲスフーテストによる調査を行うことが勧められている。1971年6月にもソシオグラムを用いての班編成の実践が掲載されている。1975年ごろには集団に溶け込めない「孤立児」が注目されているが、そのような状況を把握するためにソシオグラムやソシオメトリックテストが用いられることも見られた（[1975年5月] [1977年5月]）。

図1 『小三教育技術』に掲載されたソシオメトリックテストの例



(安藤孝充, 1965, 「児童理解のための調査いろいろ その一 クラスの特色を知る」, 『小三教育技術』(4月号), 小学館, pp. 28-29. より作成)

しかし、1980年ごろからは、ソシオメトリックテストが表立つ感じが減ってくる<sup>(6)</sup>。そして、「ソシオメトリックテストの代わり」という表現が登場するようになる。たとえば、1987年4月には、座席替えの際に児童の自由に座らせることで「ソシオメトリックテストのかわりにもなるだろう」、1991年4月には、「記録をとってソシオメトリックテストの代わりにすることもできる」といった記述が見られる。その後、『小三教育技術』では言及がなくなっていく。

なぜ言及されなくなっていくのだろうか。同じ時期、別の資料を見るならば、たとえば『児童心理』には1993年にソシオメトリックテストに反対する記事が載っている。当時新聞でもソシオメトリックテストの問題は取り上げられていた。『児童心理』で荒川(1993)は、ソシオメトリックテストの問題点として、「テストをするまでもなく知っている」と「テスト場面の問題性」の2点をあげている。1点目については、次のように述べている。「たいていの先生にとって、自分のクラスについてのソシオメトリックテストの結果なんて、やる前からわかっているのではないか」「わかりきったことを、なぜテストするのだろう。研究発表が何かのために数字が欲しいのではないか」(p. 196)。この指摘は初期の抵抗感にも通じている。自らの学級について把握することが関心の中心であり、研究上の必要はない。2点目は新聞でも取り上げられた点で、「教室から出ていてほしい人」(1993年3月11日朝日新聞)などの質問項目の不適切さであるという(p. 197)。そして、このテストが嫌であることは「子どもだって感じている」(p. 199)と述べている。

なお、Ciniiでキーワードを「ソシオメトリー 学級」で検索すると、1999年から2003年まで論文が1本もなくなる。その後ふたたび散見されるようになる。その中には、藤本学氏によるCLASSという新しい、学級集団のソシオメ

トリック構造を明らかにする手法に関する論文が含まれる。同手法はソシオメトリーがかかえる複数の問題点を改善したものであるが、『小三教育技術』で近年そのような手法が用いられている様子は特に見られなかった。

#### 4-2. 心理教育の技術 (ソーシャルスキル教育／構成的グループエンカウンター)

ソシオメトリー以外で目立って用いられていた心理学的な技術が、心理教育の技術である。2000年4月に「アイスブレイキングで学級開きをスムーズに」という特集が見られる。アイスブレイキングは、5年前に日本に上陸し、急速に広まりつつあるプロジェクトアドベンチャーで行われているものとして紹介されている。心理教育的なものは、本格的には2000年代半ばから紹介されるようになってくる。2007年には、「特別活動」についての毎月の連載に「ソーシャルスキル教育」コーナーが登場する。ミニゲームを取り入れ、楽しい雰囲気や好ましい人間関係を作ることが重視される。また、2007年7月増刊号に「心ほぐしのミニゲーム集」の宣伝が、2009年7月増刊号にソーシャルスキル教育・グループエンカウンターに関する本の宣伝が掲載されるようになっていく。2011年4月にはグループエンカウターの応用的な意味合いで、「心ほぐしの出会いのミニゲーム」がDVD付きで掲載されている。

『小三教育技術』において、ほかにも多く使用されている技術(たとえば係と当番を区別するなど)はあるが、教育以外の領域から導入されたと思われる技術のうち、目立って使用されているものはソシオメトリーとこの心理教育の技術である。いずれも心理学的な技術である。心理学的な技術であるから頻繁に使用されているのだろうか。心理学の文脈から見ると、1970年代を境に、その技術は数量的な標準化を志向する技術から箱庭療法や絵画療法などイ

メージを重視する技術が重視されるような変化が生じていたり（保田, 2009）、1960年代半ばにはカウンセリングブームが生じ（野島ほか, 1965）、学校の生徒指導領域でもカウンセラーの配置の必要性がうたわれていたりした（保田, 2009）。しかし、1960年代半ばから1970年代にかけて孤立児への注目はみられるものの、孤立児の議論と関連付けられているのはソシオメトリーであり<sup>(7)</sup>、学級活動において特にカウンセリング的な技術や、イメージを重視した技術などが使用されている様子はみられなかった。心理学的な技術ならば頻繁に使用されるとも限らないといえるだろう。

#### 4.3.「楽しい」「あたたかい」学級活動／支持的風土

他にも、雑誌を通読して目立つ特徴として、「楽しい」学級活動や「あたたかい」支持的な学級風土を重視する傾向が戦後継続して見られることがある。まず、1950年ごろから1960年ごろにかけて、「レクリエーション」というキーワードとともに、楽しい・あたたかい雰囲気を重視する傾向の記事が多く見られた。記事の例はつぎのとおりである。

- 1949年10月〔学級のレクリエーション指導〕レクリエーションの行事（学級音楽会、演劇や学芸会の機械、学級運動会）を取り上げている。
- 1950年1月〔わが級の児童組織〕学級活動としてまずあげられているのは学級の諸行事（誕生会、生活発表会、朗読会、劇と紙芝居の会、学級対抗競技）、なかでも誕生日会は子供にとって最高のレクリエーションであり、学習単位ともなるとしている。
- 1956年4月〔特集 実践記録 私は学級活動を次のように育ててきた〕（掃除をなま

けたものは罰当番といった）懲罰的な話し合いは望ましくないとした上で、「子どもたちの会は、子どもたちのものであり、それはまた、楽しいものでなければならない」と述べる。

- 1959年4月〔特集 座談会 三年生の学級づくり〕「リーダーは定着してはいけない。楽しいグループであるようにしないとけない。」
- 1959年4月〔四月の児童理解と教師のかまえ〕「学級はあたたかいふんいきが満ちていなければならない」教師と児童の「相互理解の上にたった生活感情のむすびつきこそ大切」。

ただ、「集団づくり論」の影響か、1960年前後には、一時的に競争的・批判的雰囲気が見られるようになる。

- 1958年4月〔特集 新しい学級をつくる 構成 集団指導としての学級づくりの問題点〕〈ボスの児童について。ボスへの不平不満のありかをしっかり自覚させる。不平不満を書かせる。ひとりひとりの自覚をみんなの自覚に結び付け、ボスを責める。本当は責めさせるのではなく真実を突き止めさせる。が、三年生では責めることになる。責められている子にもいいところはある、その後、自制しているなど努力を教師が皆に知らせる。すると子供たちの態度も変わってくる。〉
- 1961年5月〔5月の運営技術資料〕〈学級全体の話し合いより、グループごとの話し合いに重点を置く。生活班グループ、係り活動的グループの構成が考えられる。係り活動を中心としたグループ構成を行い、係りの仕事を通して話し合いを深めていくべき。議題は問題点や反省など。本をかえさ

ない人の名を黒板に書くなどしている。児童の中に観察係を設け、発言回数や態度を見させるなどの方法も提案。〉

しかし、1960年代半ばには早くも、楽しい・あたたかい雰囲気への回帰が生じる。ゲームや遊びが多く紹介されるようになり、その流れがおそらく2000年代の構成的グループエンカウンターエクササイズの受け入れの下地となっているとも考えられる。また、2013年4月の[出合いのミニゲームセレクション]には、なぜミニゲームをするのかということについて「だって楽しいでしょ」「楽しいからつながることができる」といった説明がなされており、楽しいことを重視する姿勢が強調されている。

- 1964年4月号増刊 [特別教育活動はどのように進めるか] 人間関係についての話し合いはあたたかい雰囲気づくりに主眼。一方で集団の規律は徹底して守らせる。
- 1967年4月 [楽しい遊びとクイズ]
- 1973年4月 [特別活動 三年の特別活動実践上の課題] 「自分たちの楽しい学級会」
- 1973年6月 [特別活動 三年の特別活動実践上の課題] 〈なんでもいえる学級のふんいきは大切。〉
- 1979年5月 [資料特集 仲間意識を盛りあげる ゲーム・遊び集]
- 1989年4月 [クラスをまとめる歌遊びとゲーム] / [4月の特別活動]「なかよし集会をしよう」
- 1991年4月 [三年生スタートの学級経営 集団・グループづくりに役立つゲーム]
- 1993年4月 [出合いをいかすゲーム・遊び]
- 1995年4月 [2色図解 みんな友達 わくわくゲームとあそび]
- 1999年4月 [仲良くしよう 出合いのゲームと遊び]

●2013年4月 [出合いのミニゲームセレクション]

#### 4.4.「小集団」というキーワード

なお、1960年代半ばから1980ごろにかけては、おそらく社会学や社会心理学的な背景から「小集団」と言うキーワードも登場してきている<sup>(8)</sup>。たとえば1967年5月の記事[生活グループを育てる]では、小集団活動を活発にし、学級の意識を高めていくために、生活グループを設定することが記述されている。1969年5月には、[三年生の社会学 グループ編成] [講座 / 小集団指導入門] などにおいて、社会学的な考察やホマンズへの言及などが行われているが、何らかのまとまりと名称をもった技術が提示されてはいなかった。ただ、その後も、「小集団」というキーワードは登場しないものの、生活グループや班、係活動のグループを構成するなどの活動はルーティーン的に年度初めに行われている。

そもそも、『小三教育技術』ではその刊行当初(1948年)から、学級活動の領域において、生活班や組(現在の班にあたる)への言及がある。1950年1月[わが級の学級組織]では、組を作り、組長を互選し、係の組織も作るという形で、学級の組織構造が現在と近い形に定まっている。学級経営論が、戦前から引き続く生活綴り方教師を中心に展開したヒューマニスティックな生活共同体として学級を経営しようとするもの<sup>(9)</sup>から、全生研の班・核・討議づくりの登場及び、そのような集団主義教育への批判として登場する、一元的な評価や競争を否定し支持的風土の必要を主張する片岡(1976)の議論などへと変遷していく中でも、学級内に「小集団を作る」という技術自体は、その意味づけが変化しながらも、行われ続けていると言える。



## 5. 考察：学校はどのような形で専門知識・技術を受け入れるか

『小三教育技術』の分析の結果、小学校の学級活動で用いられる心理学的な技術に関しては、つぎのような変遷が見られた。まず、1950年ごろからソシオメトリックテストの活用、1960年代からは特に孤立児への注目が見られた。「孤立児」への注目にも表れているように、心理学の領域においては、1960年代のカウンセリングブーム、1970年代以降のイメージを重視した技術の流行などがあったものの、それらはあまり直接学級活動の領域には現れなかった。1980年代ごろからは、ソシオメトリックテストも含め、次第に心理的な要素は見られなくなった。しばらく空いて2000年代半ばごろから、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキル教育が見られるようになった。心理学的な技術ではないが、並行して、学級活動の領域では「楽しい」「あたたかい」支持的な風土を求める流れが通底していた。1960年前後、一時、集団主義教育的な記述がみられるが、基本的には戦後一貫している。あわせて、班や係活動のグループなど、学級内に小集団を形成することの重視も一貫して継続していた。

近年、安藤（2013）でも述べられているように、学級経営の領域では、心理学的な活動プログラムや診断ツールへの関心が高まっている。注目を集めているものとしては、Q-Uなどの学級診断ツールや認知行動療法的なアプローチなどもあるだろう。しかし、それらが学級活動の現場ですべて受け入れられるとは限らない。ガイダンスブームやカウンセリングブームの際にもさまざまな心理学的な技法が登場しているが、児童の主体性を特に重んじる学級活動という領域に限定すると、その多くは、現場の教員にとって比較的身近な『小三教育技術』という雑誌では定着している様子はない<sup>(10)</sup>。学

校が心理主義化しているとの指摘もあるが<sup>(11)</sup>、心理学の技術ならば何でもそのまま受け入れられているわけではない。教師が技術を実際に受け入れていく際にはいくつかポイントがあると考えられる。ここまでの分析を踏まえて考察を行いたい。

### 5-1. 楽しい・あたたかい生活共同体としての意識

どのような技術ならば受け入れられるかを考える上で、重要な要素となってくるのが、戦後一貫して通底している、「楽しい」「あたたかい」支持的な学級風土（本稿4-3）を基本とする生活共同体としての意識である。志村（2005）は、戦前に学級文化活動として、学級メンバーの誕生日を祝う学級誕生会や学級歌の創造などが行われていたことを指摘しているが、このように、ただ学習を行うだけでなくプライベートな関係性を持った生活共同体としての意識が成立することが、学級活動では重視されていると考えられる。

その結果、ソシオメトリックテストへの抵抗感でも見られるように、教師は児童との関わりや日頃からの自然な観察を通して必要な情報を得ることができると考え、プライベートな関係性を阻害するようなテストを積極的に用いはいないと予想される。そして現在までのところ、教師自身が研究を行うなど客観的なデータを積み上げる必要も特に重視されてはいないので、あえてテストが多用されることもない<sup>(12)</sup>。

1950年～1980年にかけてのソシオメトリックテストの使用についても、その背景には、それが支持的風土を持った生活共同体としての枠組みにネガティブな影響を大きくは与えないと考えられていたこともあったと思われる。支持的な風土は基本的に重視されており、児童にネガティブな状況を引き起こさない（少なくとも引き起こしていないと思うことができる）こ

とは重要であった。しかし、1990年代に入り、ネガティブな状況を引き起こしてしまいかねないことが広くとりあげられたところ、それは極端に避けられるようになった。ネガティブな影響を嫌う心性の表れであると言えるだろう。

## 5-2. 心理学の技術を誰が管轄するか

また、1980年代以降、次第にソシオメトリックテストが使用されなくなってきたのは、心理学の技術を誰が管轄するかという問題にも関連していると考えられる。丸山(2012)は、なぜ「日本におけるスクールカウンセラーが、教員内部からの分化ではなく、外部専門家の参入によって成立した」(p. 72)のかについて、分析を行っている。それによれば、戦前から生徒指導や進路指導が教師の職域として認識されていたこと、教職員組合が内部からの専門職の分離に否定的であったこと、文部省も現職教員による担当を重視したことから、「教師＝カウンセラー」(p. 76)の時代が長らく続き、結果的に、カウンセラーというよりは「教職員間の連絡調整役やリーダー機能を担う、全校の指導機能の責任者」(p. 77)として、生徒指導主事・進路指導主事が制度化されたことが要因の1つとなっている。その結果、純粋なカウンセリングの業務を担う外部の専門家が参入する余地ができ、そこに1990年代後半の日教組の方針の変化(多忙化排除のために外部スタッフの充実を求めるように)や1990年前後の臨床心理士資格団体の組織化<sup>(13)</sup>などの影響も加わって、スクールカウンセラーは外部専門家の参入により成立することとなった。つまり、1950年代から1960年代にかけては「教師＝カウンセラー」であり、学校現場において、心理学的な技術は教師の手にあった。しかし、1975年の生徒指導主事・進路指導主事の制度化を契機に、心理学的な技術は教師のものではなくなり始め、次第に「心の専門家」としての臨床心理士(外部専門家と

してのスクールカウンセラー)のものとなっていったのである。1980年代には、心理学的な技術は、教師の管轄を離れた。分析①の期間④で心理学的な背景を持つ論者が中心でなくなるのもそれゆえだろう。

しかし、臨床心理士資格を中心とするスクールカウンセラー事業が1995年度から展開されていく一方で、教師が取得することを念頭においた心理学的な資格も対抗して登場し始める。その代表的なものの1つである「学校心理士」の資格認定は1997年度に開始された。また、より現場の教師が実践することを重視した資格である日本教育カウンセラー協会<sup>(14)</sup>の「教育カウンセラー」資格は1999年度から認定が開始された。近年、自治体によっては、次第にこれらの資格の取得者もスクールカウンセラーに多く含まれるようになってきている。2009年度には、上述の団体を含む複数の団体が連合してのガイダンスカウンセリングを普及させるための資格「ガイダンスカウンセラー」の認定を開始している。2000年代後半からのソーシャルスキル教育や構成的グループエンカウンターなどの登場は、このような、教師集団外部からの、教師が心理学の技術を再度手にするようになる動きを背景にしていると考えられる。

## 5-3. 変換・パッケージ化の必要

何らかの心理学的な技術が、『小三教育技術』のような一般的な教師に近い雑誌で広く用いられるようになるには、それが楽しい・あたたかい雰囲気を阻害しない(できれば醸成する)技術であること(本稿4.3)、小集団に関連する技術であること(本稿4.4)が条件となってくると考えられる。加えて、上でも述べたように、心理学の技術が教師の管轄下にあることも条件となってくる。好んで使用される技術は、教師の手により、簡便に、現実的に、使用できる形にされている傾向がある。

1950年～1980年にかけては、教師自身が特にガイダンス的な心理学的技術を使用する主体でもあったためか、積極的に雑誌の中で議論がなされ技術が作り上げられているような印象がある。その結果、ソシオメトリックテストをグループ分けや席替えに用いるという、学校現場での実践に沿ったフォーマットができていき、広く使用されるようになった。2000年代半ば以降に普及した心理教育的な技術については、「教師＝カウンセラー」というよりは、いったん教育領域から離れてとった資格を持った人々のみが正統な技術を所有していることになるので、雑誌の中で展開していくというよりは、教育のフォーマットに合わせた技術が外部から持ち込まれているような印象を受ける。分析①でも、2005年以降に多く出版点数があった著者の中には、教員で教育カウンセラー・ガイダンスカウンセラーである者や、教員で学校心理士である者が含まれる。そういった著者や出版物を通して、学校現場に合わせた技術が紹介され、広く普及している。

いずれにせよ、重要なことは、心理学の文脈のままではなく、一度学校現場の、教師の文脈に変換されなければ普及しないことである。特に、具体的な使用場面と結びつけて技術がパッケージ化されることが広がる上で要となっている。構成的グループエンカウンターなどは、特別活動の時間などに使用できるミニエクササイズの形をとって紹介されていることが多い。また、心理学的な技術ではないが、分析①で1975年以降の著作でも見られるように、皆でできるミニゲームや遊びをストックする企画も、『小三教育技術』ではそもそも好まれてきた。忙しい教師にとって、コンパクトにパッケージ化された技術は使用しやすいと考えられる。さらにそれが学級の楽しい・あたたかい雰囲気を阻害せず、小集団の活動を活性化させるものであるならば、広く使用されることになると言え

るだろう。そのような条件を満たすとき、学校では専門知識・技術が受容されやすくなるのではないだろうか。

Galison (1997) は、いかにして異なるパラダイムを持つ者（たとえば物理学者とエンジニア）が相互に協働し1つの科学技術を作り出すかを考察する上で、取引圏（Trading zones）という文化人類学のメタファーを使用している。異なる集団の双方の言葉に精通する人がいたり、交流を促進するような文化が存在したりすることにより、ピジンやクレオール言語にあたるような専門用語が発達、技術が成立していく。本稿では、詳細には見ることはできなかったが、学校現場の場合にも、ある技術が成立していくにあたっては、心理学の文脈と教育の文脈をつなぐための具体的な作業が生じていると考えられる。どのような形でその変換、新たな技術の形成が学校では起こるのか。今後は対象を1つの技術に絞るなどすることで、より深く、学校の専門知識・技術の受け入れのパターンを考察したい。

## 【註】

- (1) 文部省・教育委員会などの団体は一部省いた。なお、NDL Searchについては典拠データを利用した「著者名キーワード」を参考にしている。
- (2) 高校に関する本が多く出版されたのは、1974年に高校進学率が90%を超えるようになったことが影響していると思われる。
- (3) 心理教育とは、「問題発生予防に役立つ方法の一つ」であり、「思考・行動・感情の教育を通して、子どもたちの発達課題の達成や解決を促すこと」であるとされている（大友, 2009, p. 19）。主に開発的・予防的に集団に関わる実践を指し、具体的には、「構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキル教育、ピア・サポート、アサーション、ストレスマネジメント教育、対人関係ゲーム」などが学校現場などで行われているという（会沢, 2009, p. 27）。そして、心理教育を進める上では「来談者中心療法、精神

- 分析、行動療法、認知行動療法・論理療法、アドラー心理学、ブリーフセラピー、フォーカシング、内観理論」などを主に学ぶ必要があるとされている (会沢, 2009, p. 29)。
- (4) 〈〇〇〉内は記事内容を保田が要約したものである。「〇〇」は引用。
- (5) たとえば、1963年4月「学年初めのいろいろな調査」では、4月に行うものとして、家庭環境調査・児童健康調査・交友関係調査・努力目標調査・教師への希望調査・こづかい調査・児童を通じての家庭環境調査が挙げられており、交友関係調査としてソシオメトリーがあげられ、繰り返しすべきことが述べられている。心理テスト的なものより直接的なアンケートが増えている。
- (6) 座席替えや係活動のグループ分けの際に一つのやり方として言及はされる (1983年5月まで)。ただその年の4月号では座席指定の話の際にソシオメトリックテストに言及されなくなっている。
- (7) 孤立児については、1965年6月「学級のなかで孤立した子の指導」、1975年4月「班長を決めよう」で「孤立児を作らないようにしたい」と記述があるなどしている。また、1975年4月増刊では「集団にとけこめない子」という記事で、ソシオグラムが用いられている。また、1977年4月増刊の「学級集団からはみ出している子の指導」でも、ソシオメトリックテストが使用されている。
- (8) 『小三教育技術』で単語として「小集団」が登場してくるのはこの時期であるが、そもそも、ソシオメトリー自体が20世紀初頭から展開されてきた小集団理論の一つとして発展してきたものであり、また、全生研の班や核もそれらの議論を踏まえていると言える。その意味では、刊行当初から背景としては意識されてきたと言えるだろう。
- (9) 戦前の学級経営の歴史については、志村 (1994) を参照。志村は「人間共同体としての学級」として生活綴り方教師によって展開された実践をまとめ、柳 (2005) は志村 (1994) の歴史的整理を踏まえて、戦前に学級が「生活共同体」と化したことを指摘している。
- (10) Q-Uは図書文化社が発売している心理検査であり、出版社が異なる雑誌では用いられないという可能性はある。ただ、1980年代半ば以降は、他の心理検査も含め、あまりテストを行うとい

う行為自体が前面に出てこない。

- (11) 学校の心理主義化に関する議論は保田 (2008) で整理している。なお、保田 (2008) では、学校における心理学知識の受容は、心理主義化とは言い切れないことを指摘している。
- (12) この点については、今後研究者としての教師の専門性が重視されてくるなどすれば容易に変化するかもしれない。
- (13) 臨床心理士資格認定協会による臨床心理士の認定は1988年に開始している。
- (14) 構成的グループエンカウンター の提唱者として著名な國分康孝氏を会長とする。

### 【参考文献】

- 安藤知子, 2013, 「学級経営論」の展開から何を学ぶか, 蓮尾直美・安藤知子編『学級の社会学』, ナカニシヤ出版, pp. 15-34.
- 荒川志津代, 1993, 「残したい子どもの"隠れ場所"」(ソシオメトリック・テストで子どもの人間関係はどこまでわかるのか), 『児童心理』8月臨時増刊, 金子書房, pp. 195-199.
- Eyal, G., 2013, For a Sociology of Expertise: The Social Origins of the Autism Epidemic, *American Journal of Sociology*, Vol. 118 No. 4, pp. 863-907.
- Galison, P., "Image & logic: A material culture of microphysics," The University of Chicago Press.
- 金沢信彦, 2009, 「心理教育」の実践に必要な基礎理論を学ぶ, 『学校における「心理教育」とは何か』(児童心理2009年10月号 臨時増刊No. 903), 金子書房, pp. 27-34.
- 片岡徳雄編著, 1976, 『個を生かす集団づくり』, 黎明書房.
- Latour, B., 1987, *Science in Action*, Harvard University Press. (川崎勝・高田紀代志訳, 訳書1999, 『科学が作られているとき—人類学的考察』産業図書.)
- 丸山和昭, 2012, 『カウンセリングをめぐる専門職システムの形成過程—「心」の管轄権とプロフェッショナルイズムの多元性—』, 大学教育出版.
- 文部科学省, 2008, 『平成20年告示 小学校学習指導要領 第6章 特別活動』.
- 野島寛子・倉永恭子, 1965, 「カウンセリングを学習する過程の一実態調査」『臨床心理学研究』4(2): 20-29.
- 大友秀人, 2009, 「学校における「心理教育」の必要性—子どもたちの発達課題への予防的・開発的支援」,

- 『学校における「心理教育」とは何か』（児童心理2009年10月号 臨時増刊No. 903），金子書房，pp. 19-26.
- 志村廣明, 1994,『学級経営の歴史』，三省堂.
- 田中熊次郎, 1969,『増訂 ソシオメトリーの理論と方法』，明治図書出版.
- 柳治男, 2005,『〈学級〉の歴史学』，講談社.
- 保田直美, 2008,「心理学知識の受容が学校にもたらす意味の再検討—心理学知識と子ども中心主義の親和性—」，『教育社会学研究』第82集，pp. 185-204.
- 保田直美, 2009,『臨床心理学知識の制度化と学校での受容』（大阪大学博士論文）.

付記：『小三教育技術』参照記事リスト]

年	月	タイトル
1948	12	生活班について
1949	1	児童の生活と表現会
		新学芸会資料
	4	三年の自治について
		行事中心教育計画表
	7	わが学級の夏季計画
		学校童謡劇 あこの町
		夏の生活計画
		夏季施設と生活指導
	9	生活単元（第二コア「運動会」の展開）
		教育資料 運動会に於ける競争
		教育資料 学級経営資料
	10	学級のレクリエーション指導
		学習指導技術講座 コア・カリキュラム 単元 遠足
		学級紹介
	11	学習指導技術講座 コア・カリキュラム 単元 私達の通学
		教育資料 学級経営資料
	12	私の級のじまん
1950	1	わが級の児童組織
		学級劇団の誕生
	3	わが学級経営を顧みて
		学習指導技術講座 単元学習 三年生よさようなら
		教育資料 学級経営資料
	4	カリキュラム展開の技術 社会科 「三年生になって」の展開
		社会科教育資料「三年生になって」
		カリキュラム展開の技術 生活科 教室や家のおそうじ
		体験報告 小学校三年の学級運営実際
		体験報告 教育実践の一端
	5	カリキュラム展開の技術 生活指導 遠足の仕方
	6	問題児をめぐって
		教育相談室
		深山の森林で行われる公立学校の実施授業
	7	教育資料 学級経営資料
		面白くて為になる夏休みキャンプ
		子供たちとともに美の感覚を味わう
	8	私はグループの編成とその指導をこのように考えこのように工夫した
		私はこうして遅進児を教育した



	9	カリキュラム展開の技術 身のまわりのせいとん
		9月の学級経営資料
		農村児童の実態
	10	カリキュラム展開の技術 生活 運動会
		学級経営資料
	11	学級経営資料
		カリキュラム展開の技術 生活指導 毎日のしごと
		幻燈で学ぶ子供たち
	12	学級経営資料
		カリキュラム展開の技術 生活指導 うがい、手洗い、着物の着方
1951	1	カリキュラム展開の技術 生活指導 ことばづかいとみなり
		学級経営資料
	2	学級経営資料
		カリキュラム展開の技術 生活指導 道具の使い方
	3	指導技術講座 自主的にやる成績品処理の指導
		児童心理学講座 (最終回) 知能検査
		学級経営資料
		カリキュラム展開の技術 生活指導 一ケ年の反省と学習作品の処理
	4	座談会 新教育を推進するもの
		生活指導の技術 学校指導会のしつけ
		学級経営資料
	5	学級経営 特別教育活動 児童会の組織
		五月の学級経営
	6	学級経営 特別教育活動 学級児童会の指導
	7	学級経営 特別教育活動 夏の戸外遊びの指導
	9	指導技術講座 学級活動における自立のしつけ
		学級経営の頁 教科外の活動 朝の話し合いと相談の時間
1953	4	私の学級経営と児童組織
		学級経営メモ 家庭を中心とした生活調査
	6	六月の学級行事
1954	4	学級を診断する、学級を対象とした診断もある
		学級診断 ボスの傾向児
	5	学級診断 ボスの児童の指導について
	7	学級診断のあり方
1955	4	共同研究 三年生の学級社会をどう導くか—児童対先生の新しい人間関係の樹立
		学級経営資料 学習に生かされる四月の学級行事
	5	学級経営資料 学習に生かされる五月の学級行事
	6	学級経営資料 学習に生かされる六月の学級行事
1956	4	特集 実践記録 私は学級活動を次のように育ててきた 批評
		特集 共同研究 小学校三年生の社会性—入門期における学級活動の指導をどうするか
	4月号増刊	学級活動の指導
		学級経営のためにどんな基礎調査が必要か
		行事運営と掲示・展示の十二か月
	5	五月の生活指導
	6	六月の生活指導
1957	4	教育の広場 教師か、知能指数か
		特集 実践記録 新学級の子供の実態をどう把握するか I 仲間関係の把握の仕方

		特集 実践記録 新学級の子供の実態をどう把握するか II 学力の把握の仕方 ※国会図書館になし
	6	特集 実践研究 三年生でしつけない学習のかまえ1 話し合い活動の基本 今月の診断と治療
1958	4	特集 新しい学級をつくる 構成 集団指導としての学級づくりの問題点 学級経営資料 学級行事と児童会
	4	学級経営資料 三年生の子供たち
	5	五月の三年生 学級におけるグループ・ダイナミックスの研究 第二回
1959	4	特集 座談会 三年生の学級づくり 学級経営共同研究 四月の児童理解と教師のかまえ
1960	4	四月の学級経営 学級づくりのスタート 特別教育活動 選挙
	5	子どもを生かす学級づくり 学級の係り活動をみちびく 特別教育活動 遠足に生かす係り活動
	6	特別教育活動
	7	特集 学級の傾向を診断する 共同研究 学級の傾向をどうつかむか 特集 学級の傾向を診断する 調査研究 ペーパーテストの仕方・生かし方 特別教育活動 学級会活動を活発に—係り活動から広げて— 学習心理の宣伝
	9	特別教育活動 教科指導と学級づくり 学級会をどのように指導しているか
1961	1	特別教育活動 えんぴつけずりを備えよう
	2	特別教育活動 表彰の功罪
	3	特別教育活動 学年末の学級レクリエーション
	4	四月の学級会活動と係り活動 学級の活動体制を作る 特別活動 私は係り活動をこのように実践した
	4月号増刊	特別活動 資料 特別活動 学校行事 資料 学校行事 お誕生会と児童
	5	5月の運営技術資料 ※国会図書館になし
1962	5	五月の学級経営資料 学級会活動の育て方 五月の学級経営資料 母の日 五月の学級経営資料 遠足のあそび
	7	教育そうだん室
1963	4	三年生の係り活動と効果的な宿題 学級経営ノート 出発当初の係りをどうするか 学年初めのいろいろな調査
	5	学級の組織づくりと係りの仕事
	6	6月の特活 学級会活動の計画とその実践
	7	7月の特活 学級会活動の計画とその実践
		うそをつく子の指導(2)

	8	三年生の問題行動とその取扱い方
	9	9月の特別教育活動の計画と実践
	10	10月の学級会活動の計画と実践
	11	11月の学級会活動の計画と実践
	12	12月の学級会活動の計画と実践
		学級経営コンサルタント 学期末楽しみ会の指導
1964	1	1月の学級会活動の計画と実践
		学級経営コンサルタント 学習中の話し合いを活発にする指導
	2	2月の学級会活動の計画と実践
	3	特集 学級の診断
		3月の学級会活動の計画と実践
	4	長欠児・多欠児の指導
		四月の学級経営 みんな仲良く協力する学級
		学級経営実践例 児童を理解した学級の出発
		学級づくり実践事例 学年の出発によりふんい気を作る ―問題児を中心とした指導の実際―
	4月号増刊	特別教育活動はどのように進めるか
		特別教育活動のねらい
		特別教育活動の年間計画
		学校行事はどう生かすか
1965	4	ギャングエイジは環境から
		児童理解のための調査のいろいろ
		係りを決める
		始業式の日
		連載 人物日本教育史 宮坂哲文
		教育用語解説 学級構造 教室経営
	5	子どもを生かす係りと当番
		連載 人物日本教育史 宮坂哲文2
	6	連載 人物日本教育史 宮坂哲文3
		学級のなかで孤立した子の指導
		学級会の活動 議題のきまるまで
		週案・日案の書き方
		教育用語解説
1967	4	特活 学級会のスタート
		楽しい遊びとクイズ
		集団意識の発達
	5	生活グループを育てる
		係り活動の指導
	6	6月の学級経営 特活・話し合いの指導
1969	4	特集 学級の協力体制を作る〈実践記録〉協力体制をめざす係り活動
	4月号増刊	5月の学級活動 児童活動
		学級指導便利帳 児童理解
	5	三年生の社会学 グループ編成
		講座／小集団指導入門 小集団指導を活用する共同体主体学習
1971	4	鼎談 道徳・特別活動の役割について
	5	特活 学級会の係りを交代制にすべきか
	6	小集団の指導 話し合いを通して見つけさせる

		小集団の指導 しつけるぞ式は効果がない
		さまざまな能力をひき出し伸ばす
		特活 話し合い活動の議題指導
		授業の疑問に答える 特別活動
1973	4	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	5	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	6	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	7	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	9	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	11	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
1974	1	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	2	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
	3	特別活動 三年の特別活動実践上の課題
1975	4	班長を決めよう
		学級会活動みてある記 係活動の組織づくり
	4月号増刊	学級の組織づくり
		ソシオグラムとマトリックス
		集団にとけこめない子
	5	特集 自主性を育てる係活動
		学級活動みてある記
1977	4	組替え直後の効果的な学級組織づくり
		仲間意識を盛り上げるグループ活動
		一人歩きを目指す学級会活動
		年間を見通した学年会の運営
	4月号増刊	グループ構成と座席の決め方
		小集団と学級
		三年生の夢を实らせる学級の組織づくり
		学級集団からはみ出している子の指導
	5	特集 子供の意欲を盛りあげる係活動
1979	4	実用特集 学年初めの担任の仕事 児童の実態を重視したグループ編成と座席の決め方
		実用特集 学年初めの担任の仕事 三年生の夢を实らせる組織づくり
		大切な小集団の組織と指導
		特別活動一年間計画と展開
	5	特集 三年生と小集団指導
		資料特集 仲間意識を盛りあげる ゲーム・遊び集
		5月の学級経営 学級目標具現化の手立て
		5月の学級経営 児童理解の方法とアイディア
		5月の特別活動
1981	4	三年生の学級経営のスタート 学年はじめグループ作りの方法
		三年生の特別活動
	5	三年生の特別活動 実践例と資料
1983	4	特集 学年はじめの学級経営三週間
		4月の特別活動
	5	5月の特別活動
1985	4	座席替え
		学年はじめ、特別活動をどうスタートするか

1987	4	学年はじめの特別活動
		座席替え、こんな工夫を
		こうしてみよう係活動
1989	4	クラスをまとめる歌遊びとゲーム
		4月の特別活動
	5	5月の特別活動
1990	4	4月の特別活動
	5	5月の特別活動
	7	7月の特別活動
1991	4	三年生スタートの学級経営 席替えの工夫
		三年生スタートの学級経営 みんなで取り組む当番活動
		三年生スタートの学級経営 自己紹介に役立つゲーム
		三年生スタートの学級経営 集団・グループづくりに役立つゲーム
		4月の特別活動
	5	5月の特別活動
1993	4	出会いをいかすゲーム・遊び
		4月の特別活動
	5	5月の特別活動
1995	4	2色図解 みんな友達 わくわくゲームとあそび
		特別記事 特別活動（学級活動）にどう取り組むか
	5	5月の特別活動
1997	4	4月の特別活動
		実用企画 三年生らしい係活動と当番活動
	5	5月の特別活動
1999	4	席替え・グループづくり、当番活動と係活動
		仲良くしよう 出会いのゲームと遊び
		4月の特別活動
2000	4	新学期スタート企画 アイス・ブレーキングで学級開きをスムーズに
2001	4	4月の学級経営 係・当番活動の工夫
		4月の特別活動 新しいクラスのがんばり目標を決めよう ほか
2003	4	4月の学級経営 係・当番活動の工夫
		4月の学級活動 みんななかよし 友だちになろう ほか
	5	5月の特別活動 クラスの歌をつくろう ほか
2005	4	一学期の学級経営 係・当番活動で自主性・責任感を育てよう ほか
	4	特別活動4月のポイント 4月のアイディア
	5月号増刊	座席・係・当番活動にはこんなくふうも！
	5	特別活動5月のポイント 5月のアイディア
	7月号増刊	特別活動 〈月別〉 展開例と資料
2007	4	一学期の学級経営 わいわい・ぐんぐん！係活動 一人の力が大きな力に！ 当番活動
		4月 わくわく特別活動／ソーシャルスキル教育
	5	学級経営5月 みんなでつくろう！ 楽しいクラス！！
		5月 わくわく特別活動／ソーシャルスキル教育
	5月号増刊	「居場所づくり」を意識した学級開きのくふう
		座席・係・当番活動にはこんなくふうも！
	7月号増刊	特別活動 月別展開例とポイント
2009	4	一学期の学級経営 はじめての席決め・当番活動・係活動



		わくわく学級活動 4月
	5	わくわく学級活動 5月
2009	7月号増刊	特別活動 月別展開例
2011	4	心ほぐし 出会いのミニゲーム
		学級活動 4月 みんなといっしょに いち・にの・さーん
2011	5月6月号	5/6月の学級経営 チームワークづくりのゲーム ほか
2013	4	三ツ星プランの学級開き 出会いのミニゲームセレクション
		4月の学級経営 勝負の「学級開き」&わくわくの「三日間」 ほか
2013	5	5月の学級経営 一か月後の学級経営チェック ほか

(やすだなおみ 佛教大学教育学部教育学科)